

〈調査報告〉

琉球列島におけるナナフシ方言の多様性

盛口 満

要 約

全国の昆虫の方言についてはさまざまな報告がなされているが、既存の報告の中においては、ナナフシに関してはあまり報告がなされてこなかった。一方、琉球列島の島々での聞き取り調査を行ったところ、琉球列島においては多様なナナフシの方言が見られることが判明したことを報告するとともに、ナナフシに関する人々のまなごしについても考察を加える

キーワード：琉球列島、ナナフシ、方言

はじめに

ナナフシはナナフシ目に分類される、木の枝のように細長い肢体をした昆虫の仲間の総称である。世界からは約2500種が知られており、熱帯に多くの種がみられる（石川 1996）。一方、寒冷なイギリスにおいては、ナナフシ類は一種も分布がみられない（松香光夫ほか 1984）。日本のナナフシ類については、分類学上の検討がまだ十分ではなく、学名未決定種や未記載種、疑問種も含み、現在では28種ほどが知られている（日本直翅類学会編 2016）。また、無翅の種類も多いナナフシは、琉球列島においては島ごとに異なる種類がみられる場合も多く、特定の島嶼でしかみることのできない固有の種類が存在も知られている。例えば沖縄島においてみられる種類をあげると、コブナナフシ、オキナワトガリナナフシ（南部）、アマミトガリナナフシ（中・北部）、トゲナナフシ、オキナワエダナナフシ、ニホントビナナフシ、タイワントビナナフシの合計7種となる。このうち、一般に見かける機会が多いのは、互いによく似た姿をしており、また沖縄島で見られるナナフシの中では最も体長の大きなオキナワトガリナナフシやアマミトガリナナフシ（以下、本論では両種を合わせてトガリナナフシとして表記する）であり、都市部に残された緑地である那覇・末吉公園などでもその姿を見ることができる。

昆虫はすべての生物の中で最も多様な種類が知られる分類群であり、身近に見かけるものも多い。そのため古くから人々に認知されてきた分類群でもあるが、一方、種類の多さもあって、明治以降、近代科学による分類と命名が日本に持ち込まれるまでは、そのすべてに固有の名称があたえられてきたわけではない。例えば江戸時代の1775年に刊行された日本最初の全国方言辞典である『物類呼称』には、クマバチ、カイコ、ヒグラシ、カブトムシなどの昆虫の名と方言名があげられているが、チョウは「てふ」、トンボは「とんぼう」という総称しかとりあげられて

おらず、またナナフシは総称自体、とりあげられていない。

方言名がつけられた昆虫というのは、何らかしら人との関わりがあるものということができるだろうし、その多少において、人との関わりの深さが測れるのではないと思われる。

『昆虫名方言辞典』（阿部 2013）をひもとくと、多くの方言名が収集されているものとして、アリに関しては43の方言名（注：似た名称は取りまとめられている）が紹介され、カブトムシにも39の方言名が紹介されている。中でも方言が多い昆虫としては、カマキリがあげられ138もの方言名が紹介されている。ところがこの辞典を見ると、ナナフシは全国から4つの方言名しか集められていないことがわかる。和歌山の「あおとかげ」、静岡の「かつさぎむし」、同じく静岡の「せんになごろし」、神奈川の「たけのふし」の4つである。アリの方言名が多いのはなによりも身近な昆虫だからだろうし、カブトムシやカマキリは子どもたちの遊び相手として多くの地域で独自の名前がつけられたのが方言名の多さの理由だろう。そしてこれらの昆虫と比べナナフシの方言名の少なさは、それほど身近な虫とはいえず、子どもたちの遊び相手にもなってこなかったことの反映だろうと考えられる。

1. 琉球列島のナナフシ方言

著者は、かつての琉球列島の里山の多様性の実態を、聞き取り調査から掘り起こす調査を続けてきた（盛口 2019ほか）。今は姿を変貌させてしまった里山について明らかにするために、農村部で見られた自給自足的な生活が失われる1960年代以前の、主に植物の利用についての聞き取りを行ってきたのだが、そのような目的設定であったため、子どもの遊び相手となる昆虫については、聞き取りにおいて、あまり注意を払ってこなかった。ところが、年配の方々を訪ねて昔の動植物利用の話の聞いていると、昆虫について話が及ぶ場面がたまにある。そうした話の中で、ナナフシを沖縄島ではグソーウマ（後生馬）やソーローウマ（精霊馬）と呼ぶという話を耳にした。

また、奄美大島・瀬戸内町立図書館・郷土館の学芸員の町健次郎さんからは、奄美諸島・与路島では、シバサシと呼ばれる行事のときにガガと呼ばれる四本足の藁人形を作成するが、これはナナフシをかたどったものだという話をうかがう機会も得た。奄美大島でナナフシをガガと呼ぶということについては、江戸時代に奄美大島に流刑となった薩摩藩士・名越左源太の手になる『南島雑話』（名越 1984）にも、「蛾賀虫 毒」と書かれているのを見ることができる。

日本産のナナフシには毒はないが、「有毒」であるとみなしたり、「後生（あの世）」と関わり合いのある虫ととらえたり、何らかの意味あいにおいて行事にその姿をかたどった藁人形を登場させたりしているわけである。日本全国を見渡すと、ナナフシの方言はあまり見当たらないということは先述したとおりだが、このようなことを見聞きする中で、琉球列島においては、ナナフシについてのさまざまな固有の呼び名や、特有の見方があるのではないかということに気が付いた。そこで、これまでお話をうかがってきたインフォーマントの方々や、島々の文化に詳しい方に聞き取りを行い、琉球列島の島々におけるナナフシの呼び名および、特有のまなざしの有無（不吉である等の言い伝えの有無など）を調査することとした。

その結果を、北琉球の島から南琉球の島にかけて列挙する。

2. 調査結果

屋久島：（屋久島の文化に詳しい宮之浦在住の長井三郎さんからの情報提供）

「屋久島ではタケムシと呼んでいます。ナナフシが毒を持っているという伝承は聞いたことがあ

りません。また島人からは特に嫌われているということもありませんし、好かれているという話も聞きません。たいていの場合、無視されています。里巡り協議会の総会で、仲間、平内、春牧、一湊、吉田、永田という他の集落出身の人が集まった際に呼び名を聞いてみたら、どの集落でもタケムシと呼んでいるという事でした」

口永良部島：（屋久島・長井さんからの情報提供）

ボウムシ

奄美大島：（瀬戸内町・勝浦の堯文俊さんからの聞き取り）

「ナナフシはガガと呼んでいます。毒虫だから触ったりしないです。小さいころから触ったりしていません。カマキリはイットバンといいます」

徳之島：（徳之島の自然保護活動を進めている徳之島虹の会・美延睦美さんからの情報提供）

「ナナフシも最近見なくなりました。年寄りにナナフシといっても、“なんねそれは？”と言われることのほうが多くて、方言調べも年々きびしくなっています。亀津ではケインムンマーと呼びます。伊仙町中部ではケインムンマーと呼んでいるようです。これはケンムンが乗ってくる馬の意味です。母間ではシチニンゴロシ。意味は分かりませんが、不吉なものという意味ではあるようです。シチニンゴロシと呼ぶのは伊仙町の西部です。あと、トビナナフシのことは、亀津ではケインムンガッタというそうです。また当部ではカマキリのことをイーサトゥバイと呼んでいます」（手々・当義次郎さんからの聞き取り）

「シャックハイムシといいます。あれは毒虫です」

（山・米谷義一さんからの聞き取り）

「ウシドクといいます。牛が食べたら毒といっています」

沖永良部島：（知名町教育委員会・前利潔さんからの情報提供）

「ヤマガガと呼んでいるという情報がありました。知名町赤嶺の区長さんの話です。その隣集落の久志検の大山澄夫さんに聞いてみたら、ヤマガガという呼び名でよいようです。発音としては、“ヤマガーガ” ヤマガァーガ“というかんじでした。文献（『島のことは／沖永良部島』甲東哲編・1987年・三笠出版）を見ると、“ヤマハガ”で、“タケノフシ虫”という説明もあります。この本は和泊方言の本です。同じ沖永良部でも知名と和泊では方言に違いがあります」

喜界島：（外内淳さんから聞き取り）

「喜界島ではグシームシです。小枝ほどの棒切れみたいな虫という意味です」

与論島：（与論民俗村の菊秀史さんから聞き取り）

「私のところはハリヤマハガといいます。ハリは枯れているという意味です。ヤマハガはカマキリのことです。ほかの集落ではキョーリバタムヌといっています。これは壊れた織り機という意味です。毒があるとか、不吉とかいうのは聞いたことがありません」

沖縄島：（東村・有銘の金城弘行さんからの聞き取り）

「ソーローウマといって、これは小さいときは怖かったです。だから女の子を驚かすのに使ったり」
(本部町・上本部の金城正子さんからの聞き取り)

「ナナフシは枯れ枝に似ていますね。グソウウマグワーとか、グソウサイトゥーと呼んでいました。サイトゥーはカマキリのことです。なぜかしらないけれど、気味悪い意味だと思います。よくお墓の前の雑草や雑木に止まっていたからです。死者の使いだと、子どものころには思っていました」

(読谷村・古堅の伊波寛裕さんからの聞き取り)

「ソーローウマという虫がいる。盆とは関係ないと思うけど、ソーローがこれに乗ってくるそうだよとおばあは言ったりしていたが」

宮古島：(宮古野鳥の会顧問・久貝勝盛さんからの情報提供)

「知っている範囲でお答えします。平良ではマズムヌヌツカイ、マズムヌヌカタブニ。これは化物の使い、化物の骨格という意味です。狩俣ではマズムヌヌーマで、化物の馬、下地ではマズムヌガタで化物バッタです」

来間島：(久貝さんからの情報提供)

ヤマヌーマ (山の馬)

池間島：(池間島で鳥おこしにかかわる三輪智子さんから聞き取り)

「カンヌヌーマ。神の馬という意味で、肩とかにこの虫がついていたら、いいことあるよと島の人に言われたことがあります」

伊良部島：(佐和田出身の渡久山章さん、渡久地勝さんからの情報提供)

「佐和田ではナナパズマーロといいます。ナナパズは七つの脚ですね。マーロの意味はわかりません。『伊良部方言辞典』(富浜定吉)によると、字仲地ではマズムヌヌカサギーとかマズムヌヌーマというそうです」

多良間島：(久貝さんからの情報提供)

カンヌヌーマ (神の馬)

石垣島：(竹富町教育委員会・島村賢正さんからの情報提供)

「石垣島の四箇字では、文献(『石垣方言辞典』)によると、ティンシ ジューン パー シュマと呼ぶとあります。これは頭をもたげて脚で天と地を指すように見えるので、“天も地も我が島”という意味です。あと、白保でアパビヤポンと呼んでいるのを聞きました。意味はわかりません。白保は明和の大津波以後、波照間から分村してできた集落ですが、波照間ではそんなふうにはいいません。なので、子どもたちが名付けた新しい呼び名かもしれません」

鳩間島：(島村さんからの情報提供)

「タンコウムシ(炭鉋虫)で、この虫が炭鉋のある西表島を向くからついた名前だそうです」

波照間島：（島村さんからの情報提供）

「波照間の方言ではキッチィンムシで、“小枝虫”の意味です。父に聞いたところ、この虫に関する言い伝えなどはないそうです」

3. 考察

『昆虫名方言辞典』にはナナフシの方言名は4つしか掲載されていなかったが、先述の調査結果を見てわかるように、琉球列島においては、多様なナナフシの方言名が見られることがわかる。これは何より南島においてはナナフシが本土よりも身近で見かける機会が多いことによっているだろう。また、『伊江島方言辞典』『今帰仁方言辞典』『与論方言辞典』など、琉球列島の地域の方言辞典をひもといても、カマキリの方言名は掲載されているがナナフシの方言名は掲載されていない。ナナフシは方言調査に当たって、それほど重要視されてこず、たとえ方言名があっても辞典などに採収されてこなかった経緯もあるのではと考えられる。今回、琉球列島においては、ナナフシに関してこのような多様な方言名が存在することが確認できたが、与那国島など、まだ聞き取りを行っていない島もあるため、より詳細な調査を行うことができるのなら、さらに方言名は増えるであろう。

例えば、国頭村・奥ではナナフシの方言としてバジー、バジーサルゲー（注：サルゲーは奥方言でカマキリのこと）と呼ばれることが報告されており（当山ほか 2016）、沖縄島においてもソーローウマやグソウウマという呼び方と異なる方言名があることがわかっている。なお、奥出身の宮城邦昌さんによれば、「バジーサルゲーに咬まれると、皮膚病の一種のジサッパ（銭形たむし）になるといわれて嫌われた」ということである。また、2020年の聞き取りにおいて、同じ国頭村にありつつも、安田においては年配者からナナフシの方言名を聞き取ることができなかった（盛口ほか 投稿中）。琉球列島の島々においてはナナフシの方言の多様性がみられるわけであるが、地域によってはナナフシに方言名を与えていない場合というの也被えられる。

また、ナナフシの方言名は、姿を竹や小枝、杖になぞらえたもの（タケムシ、キッチィンムシ、グシンカームシなど）のほか、細長い脚をゆっくり動かす特有の動きに着目した命名（ティンンジューン パー シュマ）、精霊や魔物といった霊的な存在を連想させるもの（ケインムンマー、ソーローウマ、マズムヌツカイ、カンヌヌーマなど）、有毒であることを思わせるもの（シチニンゴロシ）、そのほか由来不明なもの（ガガ、ナナパズマーロなど）など名付け方も多様である。

細長い肢体をもったナナフシは、一種異様であり、そのために「気味の悪さ」や「祖霊との関わり」を思わせるまなざしが生み出されたのは、うなずける。そうした思いがさらに「ナナフシ＝毒」という思い込みにつながっていったのではないかと。数少ない、本土のナナフシの方言の報告例の中にも、「センニンゴロシ」という呼び名があることも同根であろう。一方、興味深いのは、池間島のように「ナナフシ＝運がいい」という意味付けがなされている島があることだ。

また、方言名の中で、その特有の動きが命名の由来となっているのは、石垣島の例だけである。ただし、沖縄島においても、ナナフシの動きに注目した遊びがあったという報告はある。

「（ソーローンマと呼んでいたナナフシを）捕らえて「トーヤ・マーガー」（唐は何処）、「ヤマトー・マーガー」（ヤマトは何処）と唱えと、小虫の前脚がその言われた方向を指すということで、虫を相手の遊びである（前川 2003）」

この遊びはガのサナギを使ったものが本来だ。ナナフシの方言名について情報を提供してくれた、読谷村の伊波さんは、カイコのサナギのことをトーヤマーと呼んで食用としていたという

話も話してくれた。『琉球語辞典』（半田編 1999）でも、トーヤーマーの意味として「サナギ」が充てられている。ガのサナギの頭部をもち倒立させると、腹部が動くさまをみて、「唐はどっち？

大和はどっち？」とはやして遊ぶ、単純な遊びである。なお本土では、同じようにガのサナギをつかって「西どっち？」といっちはやす遊びがあり、柳田國男もサナギを「にしどっち」と呼ぶことについて一文を書いている（柳田 1990）。

このように、ナナフシの動きに着目する遊びは石垣島以外でも見られるものである。しかし、その動きを、虫が「天地、我が島」と言っているとみたてたのは、やはり石垣島ならではのユニークな固有性と言えるだろう。

まとめ

明治から昭和初期にかけて石垣島測候所の名物所長として有名だった岩崎卓爾は、気象観測業務の傍ら、島の文化や歴史を掘り起こし、記録、発表することにも力を入れた。さらに当時まだ学会に知られていなかった島の昆虫たちを中央の昆虫学者に送付し、その名を問い、結果としてイワサキゼミ、イワサキクサゼミ、イワサキコノハなど多くの昆虫にその名を遺した。その岩崎卓爾が存命中の1926（大正15）年、『児童の産業』という地方紙に卓爾をたたえる替え歌の歌詞が発表されている（「児童の産業」16号 大正15年5月10日）。八重山の有名な民謡、鳩間節の替え歌であり、卓爾の業績をたたえるために、島の生き物たちが、それぞれ祝祭の役割を果たすという構成になっている。シオマネキが三線をひき、ヨナグニサンが踊り、イワサキヒメハルゼミが鐘を鳴らし…という中に、竹節虫（てんぢんばしま）も登場する。その役どころは、島の豊年祭などでも奉納が行われる棒術の使い手（てんぢいんばしまぬ腕は振り 六尺棒ぬ面白や）としてで、ある。「毒」や「気味の悪いもの」と関連付けられてしまうことの多いナナフシを、昆虫と関わり合いが深かった人物であるにせよ、「島の偉人」の祝祭に登場させるまなざしは、ナナフシの方言名に独自性が見られる石垣島ならではのことであるといえるかもしれない。

琉球列島は、その固有の生物相でつとに名高い。と同時に、生物と関わる文化に関しても、これまで認知されている以上の豊富さを秘めているのではないかと思う。ナナフシの方言名や、ナナフシに注ぐまなざしの多様さも、その一端であると言える。

参考文献

- 阿部光典（2013）『昆虫名方辞典』サイエンティスト社
 石川良輔（1996）『昆虫の誕生』中公新書
 日本直翅類学会編（2016）『日本直翅類標準図鑑』学研
 当山昌直ほか（2016）「沖縄島国頭村奥の動植物方名とその利用」盛口満ほか編『琉球列島の自然伝統知』沖縄大学地域研究所彙報11号 pp:81-142
 半田一郎編（1999）『琉球語辞典』大学書林
 前川守夫（2003）「小話“トーヤ・マーガー”考」『あやみや』15号 pp:40-41
 松香光夫ほか（1984）『昆虫の生物学』玉川大学出版部
 盛口満（2019）『琉球列島の里山誌』東京大学出版会
 柳田國男（1990）『柳田國男全集 19』ちくま文庫

Diversity of dialectal names for stick insect at Ryukyu Archipelago

Mitsuru MORIGUCHI